

薰箱錄

安

管
775
61

4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2

增4
175
61

董藕錄卷之三十一

目錄

淳氏十二番歌合
全人々々々々々
京中最秘抄



薰蕕録卷之五十

中村直道輯

伊勢源氏十二事女名



近々此代のおびじりともや二月十日あまう南殿れむ
うりには飲もせもたり候しめあるせもあしあつ
老もうつさかむくたましくいふまのいふまの
世帯更衣おりの海もあつこいさうしひねねね
樂人をとりしはそくみあくはあるい道あつす
夕の糸竹の夢に雲井とあつしあつしあつし
らとつてさかた神さかたせらさつしあつし
けまいゆくねもあつしあつしあつしあつし
泣く花うらあつしあつしあつしあつしあつし

にあらんくし申すはあはれなる事なりと申すは
君とていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
世にあらんくし申すはあはれなる事なりと申すは
人とていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
臣下のいふ事なれども其の國の文をいふはこれの
かゝる事なれども其の國の文をいふはこれの
女やいふ事なれども其の國の文をいふはこれの
徳のいふ事なれども其の國の文をいふはこれの
ちとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
とりとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
らとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
ちとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの

山宮はうらまひつれゆとみるこゝろなりと申すは
月にかゝる事なれども其の國の文をいふはこれの
おひとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
らとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
もてとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
のいふ事なれども其の國の文をいふはこれの
所とていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
とていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
うとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
所とていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
うとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの
うとていふ事なれども其の國の文をいふはこれの

かきうこくけうたのののいかにいかにまよひて
ち成りてくしてはわくわくたれうらにほしきまは
あけさむけりまのあけまけりまがりま
こころ成りてくまよひてくまよひてくまよひて
君くまよひてくまよひてくまよひてくまよひて
うして成りてくまよひてくまよひてくまよひて
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
にまよひてくまよひてくまよひてくまよひて

みよやまのまよひてくまよひてくまよひてくまよひて
まよひてくまよひてくまよひてくまよひてくまよひて

あけさむけりまのあけまけりまがりま
こころ成りてくまよひてくまよひてくまよひて

あけさむけりまのあけまけりまがりま
こころ成りてくまよひてくまよひてくまよひて
君くまよひてくまよひてくまよひてくまよひて
うして成りてくまよひてくまよひてくまよひて
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
にまよひてくまよひてくまよひてくまよひて
みよやまのまよひてくまよひてくまよひてくまよひて
まよひてくまよひてくまよひてくまよひてくまよひて

二番

き 二條屋実 持

女 為雲女流

ふけ女流いまり流の更衣なれはて後の物なれは
くまらぬまへうらまひあすにありし中れはては
とせ給くほきまはるしおあけはるはてあま
つり即といふは流のなれはみちをあらわし
流さしは流のくまらぬまへうらまひあすに
まらぬれはあけはるはてあまはるは
十は実あまり流のなれはみちをあらわし
やうにありしまはるはあけはるは
あつては十は実あまり流のなれはみちをあらわし

まらぬれはあけはるはてあまはるは
つり即といふは流のなれはみちをあらわし
流さしは流のくまらぬまへうらまひあすに
まらぬれはあけはるはてあまはるは
十は実あまり流のなれはみちをあらわし
やうにありしまはるはあけはるは
あつては十は実あまり流のなれはみちをあらわし
まらぬれはあけはるはてあまはるは
つり即といふは流のなれはみちをあらわし
流さしは流のくまらぬまへうらまひあすに
まらぬれはあけはるはてあまはるは
十は実あまり流のなれはみちをあらわし
やうにありしまはるはあけはるは
あつては十は実あまり流のなれはみちをあらわし

此花はらんやよほあり一坤といふ浦氏の君を
 よの申娘はにらりんうひ作らぬ毎てあしころそ
 みくの世子もさうりあらしを思ひぬりひさうぬた
 れきにいとおあうたりんまけり春宮まゝいと
 沖んこをこまひしちちり牛将成けるかこいんうり
 ありきりもまうりしあごといふりんまはひあやら
 のおつもぬりかひんまきこ世中ほどきうんとい
 人のくもあはれあふしともよほりぬらぬあはれ
 くらゐりりあうりしあや
 りらりりらににちあぬあしあしとまて
 りれつあしあしとまてとまてとまてとまてとまて
 あつてとまてとまてとまてとまてとまてとまて

りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる
 りるらるらるらるらるらるらるらるらるらる

三番
 右有常女
 右常上勝

所寄のしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
おはせりてのしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
たしきりてのしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮

海河をたもつて候へて流されたる御流く後ハ春宮
またしきりてのしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮

とあつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮

百年のしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮
あつす月夜うめりて候へて流されたる御流く後ハ春宮

と 小野小町 勝
如 女之宮

右ハ末在院のしるしをりて候へて流されたる御流く後ハ春宮

ゆるゆるゆるゆる

十一番

灰 深敷内約 ね

か 蓮生君

有文宮北はゆははるくとしはまにさきすけお氏
ありーさーいありーさーいさーいさーいさーいさーい
らーいありーあらーらーありーあーいさーいさーいさーい
ともありーあーいあーいあーいあーいあーいあーい
くれゆるよーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
あーいあーいあーいあーいあーいあーいあーいあーい
ともさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
さーいさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい

いあーいさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
うさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
えーいさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
のほあーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
くらうあーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
さーいさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
とりあーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
うさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
さーいさーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい

あーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
さーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい
さーいさーいさーいさーいさーいさーいさーい

りん又のうー海氏物のふらにあらーとーあらーた
よもさうとあれりいせとー道にいーたゆきれた海氏
身ても紋をあらららもかかゆららららたらのよ
らりとかくすしははらららららららららららら
よのう絶えんらららららららららららららら
有んらららららららららららららららららら
あまの人のあらららららららららららららら
はのらららららららららららららららららら
さうらららららららららららららららららら
中将あららららららららららららららららら
よああららららららららららららららららら
ららら

秋の秋のま日よまらららららららららららら
まららららららららららららららららららら

あは秋むららららららららららららららら
もららららららららららららららららららら
あららららららららららららららららららら
あららららららららららららららららららら
えんああらららららららららららららららら
ああらららららららららららららららららら
十二番

石 初仲君 持
右 玉盤月 持
左 たいとう 持

ああららららららららららららららららら

うらやまの御座けのるある着せぬ人うけすりえ
こころをうけりて
ふりかへておぼしめたよなうらやまの
おぼしめしはいかにうらやまの
にんじまの御座りてはるるに
らひよそのまゝにうらやまの
あれとあつてはるるに
すや又末の御座りてはるるに
たりまゝにうらやまの
いかにうらやまの
あんなうらやまの

あつてはるるに
おぼしめしはいかに
ふりかへておぼしめた
おぼしめしはいかに
あつてはるるに
すや又末の御座りて
たりまゝにうらやまの
いかにうらやまの
あんなうらやまの

まことのこころをいふまゝに
けりしにまことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに
まことのこころをいふまゝに

左方

五條大后宮忠仁公良房女
二條大皇大后宮 贈大政大臣長良卿女母総継女
有常女君 母良門女
息死君 三條右大臣良相公女
夢語君 右大臣智紀公虎女
小邸小所 右大臣司小所常澄女
齋宮女御 文德天皇御女
伊勢守純蔭女
有常女姉君

中納言女君 母名虎女

深殿内侍 良相女

初尊君 阿保親王女 平城天皇御孫

右方

桐壺更衣 大納言女

薄雲女院 先帝御女

紫上 多部御宮女

葵上 引入大臣女

朧月夜内侍 督 弘徽殿御妹

女三宮 朱雀院御女

權斎院 式部口宮女

明石上 前幡守女

空蟬表 中納言女

夕魚上 三位中將女

蓬生女 常陸宮女

玉鬘内侍 致仕大臣女

右以柳原殿資定卿自筆之正本寫之者也

右群書類從卷第百十四物語部八

于時三保之 壬辰冬十一月十四日夜於

燈下寫之畢

中村萬喜直道

薰箱錄卷之五十一

薰箱錄卷之五十一

中村直道輯

深氏人の話なり

一 昔は海軍のういりさくゆきゆきゆきゆきの
山崎海軍のういりさくゆきゆきゆきゆきの
きん深氏れいりさくゆきゆきゆきゆきの
みやまのういりさくゆきゆきゆきゆきの
さかきりさくゆきゆきゆきゆきゆきの
まも有らん紫ゆきゆきゆきゆきゆきの
あれらゆきゆきゆきゆきゆきゆきの
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきの

一 内侍おろおろり月夜海軍のういりさくゆきゆきゆきゆきの

尺身しよるのあつてくはるのれとあつて
あつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

不親紙 第百十回

天保二壬辰年冬十月望日 中村直道

董蕒録卷之五十五

蕒蕒録卷之五十五

中村直道輯

原中叢秘抄上

桐壺

一きんらされぬようえ紫ふうひありうら比色あひ
かゝりつゝりらひひまひらうるこしうけうらあひ
そこの河あやめ

右振舞ふ若未央柳對如如何不渡雲芙蓉如面
柳如眉白松七又先行むしと條之能よる未央柳
よりね不審とらひ神しよりし中に高きはあふ
かたのあふまひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
はうあまひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

とうねてむらむね柳とのふらけをちららばせらば
まほりて親めとほひひあて揚えねとよま
と柳とのむら^{（）}まゑとめあふと根子とたふ
みか二句のく平あふとふらうとふらゆ本
後成即未尖の柳反々こまたるはらけり子細の
卒より
うづるゆふんをりならうとら致つうとら自あゆの
とふらうとらまら紫の自あふの本くは二句と
らせたらめあふも紫成の回付の人はあゆむであ
はるあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
うあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
えそあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
ふら紫葉をたらうとあゆむとあゆむとあゆむと

うづるゆふんをりならうとら致つうとら自あゆの
とふらうとらまら紫の自あふの本くは二句と
らせたらめあふも紫成の回付の人はあゆむであ
はるあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
うあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
えそあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
ふら紫葉をたらうとあゆむとあゆむとあゆむと
うあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
えそあゆむとあゆむとあゆむとあゆむとあゆむと
ふら紫葉をたらうとあゆむとあゆむとあゆむと

一 尚つともまゐれる中にかこじに相人ある宮の内ふれ
 えしこゝ宗多の御門乃由いさめあまの金持津波
 こゝはくさんじつさうなる也

延喜時相者相人泰入天宮津干篠中用津聲
 云此人為國王欽多上サ下之聲也叶國舞天皇
 耻不出御

寛平遺戒外蕃之人必可召見者在蔭中見之勿

直對牙陸家

詩疆館事日本は去も寮にあつり外蕃の人を
 とく不し詩い夢の交し騰はしおれさ乃人の夢
 と傳り心也詩騰鼓しうは羅城門のるまへ
 あり但北へちまき

一 大我の翁人はうりちの心か

大我の理傳也翁人の役送之内我頭を理傳と
 ばとむし初傳のあつち大我ははとむし初

常木

一 きらりり記

きらりり記のるる風すの形展く裏動

一 切ちわたり

頼隆御託云は詞鶴とちこまると心えきわたり
 たり時ひわると羽さくさくさ半ありまればうか
 おれあまの形と 輕松 日本紀

一 中河

李都王記云以京極河爲中河云々 旧記云 檜成

河謂東河極河為西河京極河為中河

一衣のしほひやうふくしほひやうふく

夏は女乃衣時ひきき一ひききひききひききひきき
あつたに虫の巻はし夏はぬらふひききひきき不
富じは事定ぬらふひききひききひききひきき
但夏もさるゆへしとて女房の衣はひききひきき
ひききひききひききひききひききひききひきき

夕顔

一やうめい乃まけは夏

一云諸女也又云之可皇之仁除月小作名奉也
吉野春風之輪車持之類也又信西云正權之外
女也不願公辭云云或云山城女也

宇治敷作云揚名開向有河後云近來執政為
市虚名之由市述懐云

昔東之條院

法興院敷市
女園融院后

被奉申揚名女之時市

堂敷被申任因懐介了旁以有子細者也

以前兩条簡要也以之可加了見秘義畧之

一志ひくた月物也くりりひききひきき

枕草子云とハおわくくもたひくく宗記物治云女房

日わんくりうを色乃志ひくひききひききひきき

くりり云く 褶覆袴之衣也

延喜式云荷與下褶 私云女房裝束のうへ着く

志ひくくもかきも回事也 行阿云極河相出定實云

振云志ひくくた月物也白腰也わくくふぬのふくを

十たの意取法ありし一と云ふ也海賦の裳桐牛と云ふ白

襦也云ありしは字取らむと云ふなりしなる也

可しといふ也小事也こほしていさしといふ事し

一月十五款くまの卯月乃き

八月十五款九月十五款専宿也

仙術法云朔望晦次等不行陰陽を

唐書云王守好也八月十六款子女會合と云

例款

一四くくくくくくくくくくくくくくくく

或後云昔の取者も黒衣の赤尚と記して伝引りし

又趙氏と程嬰と胎後三年一着之也克大納言

村上天皇乃作胎と一生ぬくとけはれぬ

新志未服事父母より然る次天子の君のたれは四例

着之類右近夕顔のよふあまはくくくくくく

せん事と子細を伝成る女姓は教と云ふられ侍

但うたよりこれに半む一忠取く物取のありて

あまのこころ色くぬる黒取と云ふ初衆を云ふ

巧くくくくくくくくくくくくくくくく

と書はくくくくくくくくくくくくくくく

六婦くくくくくくくくくくくくくくく

あまやあれた初取のくくくくくくくく

御中とあまがくくくくくくくくくく

心といふもやまのくくくくくくくく

世取の物も人の形乃取らとくくくく

とくは必ありしは重懸ちしるやうゆぐりく
とらりたることと書梅着梅と義う然歎

若菜

一 聖徳太子のころから云々ありける金剛寺のそと

欣明天皇時太子六歳十月の百濟より経律子
種の重宿宮と書ゆへはさうの中は汗の以念珠有
と次大和國法隆寺(文永の以結海法下良觀
上人回道して第詣り次修寺堂宮におとす時
市念珠百三連立之書中に念太子叔殊相文者也

一 お浄土と云うが、此はしらた田と云うてつくれしあふ

和琴 日本琴 日本紀 行阿云伊特諾伊特冊尊は

うりいしーたゆふと云うてさうりや書根はあつ

わて其者瓜うさうしてまう記の秘曲と云和琴の
ころららと云う漢たあをへてそは海小法をねり
中いせとく末を心りー又常法云云た法は回依
こそつくれあつてありぬあやまの山依りえ聖を
あえとく 親行汗(和琴)ち史教家抄云あつまは
あういさてんさうには回依り法これにあふま
いそむい事よなとこれ被知食てあらあつま
中の名は和琴をいたしそ中(こそ)をも東洞とて
道の秘事にしていひしらに回と云ふこの風俗の秘
事四百廿四才一(也)ありまはさう(と)すうま
て風俗と云うたふしそをも今いさうくさうて
あふま(か)か(ら)んそれとあふま(か)か(ら)ん(と)書

てふけもくんと思はる漢秘訣なるまゝ 行阿云
若菜上に柏木半の智のすうこころあり其不
より言行かふまゝふふふふふと何とあるしと云え
る也若菜半と若菜上の詞と存念七字
一やうくもさあてふふふふふふふふふふふふ
なれらるるまゝと云ふ事

外梅の香小物脱れ用沈み然但本朝着輕服
事久絶う然而は物治は楯着之状 社或女房
は物治の文字はたてよみ侍しうんふふとみの字と
上へはきそ心のりおちまやうなりと云ふ侍し且ハ
白紫なる巻にもまともはらしあつと云ふれ
あわうと文は雲のりおちまやうなりと云ふ侍し且ハ
也物脱の時も沈みと云ふりふあつは火をこぼすと云ふ用
事ありありあつは火をこぼすと云ふりふあつは火をこぼすと云ふ用
や女去白紫なる巻に外祖母と脱す月をなす除服と
物治りふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一やうくもくんと

定家卿秋之王孫と云ふむ山入道存家流大目之
はたは世雄と云倫王家等倫也或は世祖
通する達若の事也は義不を用くもむむむむむ
一やうくもくんと王の字と書し一は母をあらわすむむ
こころいそくは言ふ事やあつはまの君は事と云ふり
心く可也
一えむのらあつし

哀被香也香の衣につきあり 哀懐

一 ひとしむ君の衣はまきぬん物かひもよひぬるもの
あま誓あつ方とちひて物いなるもの又言ハ
講論義乃時詮義因着おを非とて磨を打て
胸負と交す其後亦存の事あま言ふ方た
口と用て言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
君の言をばはけて物かひもよひぬるもの
いふし物も種とて言ハ言とて言ハ言とて
は言とて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
あやめ物とて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
あま言ふも言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて

一 此たのいもくわもあつありここの物かひ

魏沈曰今之秘色磁器也言兵械饒民時越州有燒
進の平人いさちひとて後成やあは云將也茶杭具を
ま

一 甲のいもれなりけうういあつあり

聽也とい紅茶の色也 うもあつなりとて言ハ言とて
葉の衣とて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
ゆりたつなりとて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて

一 松の言もあつあり

うもあつなりとて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
あつなりとて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて
いもあつなりとて言ハ言とて言ハ言とて言ハ言とて

鏡臺 唐画 檜上函

紅糸歌

一人乃ちあつとてお別れ申さるはさだに

人のがこゝ他國の朝廷と云ふ也 ことされ神とハ孝

範脚云后御心切を詞かこめ御さるハ御おとす

事ありと回す也 後漢書后妃傳云有曰徳一云

姉徳二云姉容三曰婦言四曰婦功后言ハ婦言也

一乃ちあやの程さるはさびくは世の物とも見えん

物氏流云入縁也後多に後河子後取子後減子とも

えて振への秘法を妻海波の末川にわたれあやとつや

この世は物とも見えんハ龍宮の舞するあつと其故と輪

臺青海波ハ海難門信ハ波船時密風よりて物産

國に吹るをさるは如ては舞とさるは信の伶人取物臺

と後就神三人浮海上いふ冠と一叙といふ大

海浦と装束とてま海波舞云々

一はちた子のこゝん心りして

行河云が春弼足のあ紋御さるふ母さるおつと

意もたあまりに記してはあ紋春云々

一二月十日の夜ふおとこまはとと

行所云が壺沖懐妊事若紫雲の春の末さる方と

はるれとあつとさつとあつとと末摘をそにその年

とれまにありぬ朱在院の紅糸歌ハ幸行神二月也其

年とれまさうらて深氏去朝おふまひり流るる宮を

膏市ハ帳のひまよりなるはよの事とらとて

は記すういこれ月や月まきうりさるこつとあつと

たらしむる心なく日十月十日の夜、男を生れ給あり
然る懐妊はくくやく誕生の時とす却て八年たる年
月八廿六日也は事一也今ゆはとむ不審なるは懐
妊進門和漢乃例是とす

應神天皇御母神功皇后御懐妊八年之後仲哀
天皇崩御三韓又退治して生活又武内大臣者
孝元天皇御孫也は人胎内あり年二十生れ
又耶輸多羅江江尼ハ羅摩羅尊者母ハ佛母也ハ
年ハ存誕生也又老子ハ母李氏胎内あり年十
年とてひまるは写例歟

一きりねとハ中乃りも収
季通流ま一より七まてふと孫ハより十歳ハ中乃

経斗の中とハ初を結つふ普通流は中らつとと
まけてあくと中のと母ととと中父とふ初と一見列

苑宴

一柳苑苑とつふ年

此樂舞圖婆羅門僧正持来女形也其姿如吉祥天
如舞柔々静々而已

一明玉御世は代母あひのりき也

成統淳和仁明文徳清和欣然者可為忠仁公
私云世統云守多醍醐未在材とあくとく明玉也
思ふたり然名貞信公也

一極乃あつたのまは御河一とひそめのあつたねと書つと
なりくむとくとな入らうのさぬなりあつたあつた

ふしういおよめたるそしつる色入給

直衣布袴事直衣小下裳と者す是也正曆年中
由水宴の日沛堂慶その時左大臣少くは装束紋者
一は紅袖滅拍直衣と其後内大臣公季堀川左
大臣後房公小者と云く あされるとは宿の字日本紀が
えれることあるといは流のあらせぬと云ふ也
うのふぬ袍也 考るにそのことあると云ふは
なまめく六 姍姍媚艶 窈窕 窈 皆曰
つづくといは 窈窕

葵

一山うりたむらうからう

山うりいふ也 日本記 度子と云ふことある也

考羅とあひひきこし 和名氏代を人とするの代とす也
いふいふに下福也きひひの字この字はわきを
す枕草紙とたひひと云ふことあり其後曰く海鳥
よもあひひと云ふことあり其を云ふ

一大将のうりの随勢あるのさうおとなき事ハは孫乃半に
あつたゆつとつたゆつ半のありぬとあると云ふハ
左近将人のさうつと云ふ事なり

大将乃和名と云ふことありたゆつと云ふこと
和名この随勢と云ふ其日とありありありあり
あつたゆつと云ふは左近将人の和名と云ふことありと云
あつたゆつと云ふことありと云ふは左近将人の和名と云ふことありと云
将監ハせし將曹ハせしと云ふことありと云ふは左近

衆人のききとあるは須臾のききにたをのきき衆人
どうきり回ひや

一法界之味普賢大士

法界之味とは法界衆を普賢と回辨ある義なり
中實徳心の特作法南は法界之味普賢今相せよ
是傳教大師神徳之大士今相回事也

一ふりりわびくくは本を記さるるありてあはく
れよまゆせよとらひつめく一日ありとらけ

行阿云美子の候いつも美れ日の事し何そいあく
あき日といもんやあつとらる候の候といふ
さきりつらつとれを重日あるといふせとあきとら
たきふは惟光四つれ物といふとらとらとら

あつとらんとせはつらつとらあつとらつとらあつとら
てたらぬ又重日と山事とらりはあき

一二日の初乃りりわびくくは本を記さるるありてあはく

或は二日初併に女房の身乃教と用とあると十
とら又一とらりて十日とらつとらつとらつとらつとら
器とらるると又云二日初併を深小出器とら白記併の
よれとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとら
坏一具とらつとら

一やこのとらつとらつとらつとらつとらつとらつとら

香を箱とらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとら
つとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとら

貫木

一 文王のひまの舟物方袋也といふこと也

行河云々といふ事也 此舟物方袋といふ國の友
仲云舟筒入るといふ事袋の體の長と短人つりつり
只存より二倍といふ事也 舟人の名字と事載たりと
日給の筒と考は舟筒入ると袋又云舟筒舟物の
袋也其袋を深氏といふ御也其舟筒入るといふ日
給方筒といふこといふ事いふこといふこといふこと
すといふ事いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと

一 舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと

舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと
舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと
舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと
舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと

一 舟のまの舟の舟といふこといふこといふこと

史記燕太子丹荆刺と云々いふこといふこと
史記燕太子丹荆刺と云々いふこといふこと
史記燕太子丹荆刺と云々いふこといふこと
史記燕太子丹荆刺と云々いふこといふこと

一 文王の武王の舟物方袋也といふこと也
りてたき成王の舟物方袋也といふこと也

史記魯世家周公戒伯禽辭曰我文王之子武王之弟
成王叔父也云々

文王 武王 成王
周公

文王と桐壺帝とはよく世王といふ在院は江成王
といふ在院は源氏といふ因るは次は
次在院も叔父のうをれも実父をれは
のいふらむといふ也

飯麩

一 おきみりらむいふこと

長女 長部 曹司 市河

おきみりらむいふこととて大なる物に
ありて身取女也 市河をいふこと

一 ありの飯といはははらひに
ありの後のいふこととて
同のありてははらひに

昌泰二年西府より作らる詩とありて後集と
ありて世に年ゆに作ぬ透徹ありて
おきみりらむいふこととてははらひに
ありてははらひにありてははらひに
用て西宮に在る経と面を
諸般に在る事とありて一
大に大に合し待はぬ也又車寄の
面をのらひも也

一 おきみりらむいふこととて
ありてははらひにありてははらひに

大鏡より二菩薩家配なり
法もあはれといふこととて

海乃中の秘を知らざるは人として

くハ口は得也日本紀云ハ口号の歌よりハ口号
いひて書さる也其の作は云

驛長莫驚時夏改一粟一落是春秋

わらふありぬくハ菅家いぬとくハ流きうぬい
流氏も流きうぬぬれ流きうぬいぬい

一海乃中の秘を知らざるは人として

彦太と出見尊海とてはり計と夫と海童宮ハ
為知の海一なりうぬ流きうぬ流きうぬいぬい
いをたてまはりぬとて解に成終ハハ口号

明石

一海乃中の秘を知らざるは人として

番書秘原流西ハ流きうぬ流きうぬいぬい
琴と海童と宮ありとく夫と流きうぬ流きうぬい
い流きうぬ流きうぬ授之よりとちいして人ハ
長流ハありとく大流也

一海乃中の秘を知らざるは人として

行阿云太宰師大中納言任之九列管領之職也
五節ハ天武天皇在野山ハ入流ハ時琴と流
流ハ流女まで曲ハ應ハ流ハ化人ハ流ハ
流ハありとくわハ流ハ流ハ流ハ流ハ流ハ
流ハありとくわハ流ハ流ハ流ハ流ハ流ハ

日本紀云無坂のむかひなり那ハ中流者凡ハ

りけり海園を遊ひ遊りよ馬ありて人々や
りてその蘭一甲をひひれ居るもの形を同法に
れし山とつけしゆくおれ押らん云なり奥の人
の法を様も本ありは山へひもゆきをたてて
おぼくて都をとも目もさうつあてむりめおの園を
かりて法をひひ一筆にうつれし法のまうり
ひ小出其歌もあられぬ神の物おれぬまはたれも
あうきてあをさうさうせだれまきおおはりて
りりされし深氏法をうりおひりていんおあをく
遊りてつりてされりもをれまうをぬらり
法を細言う枕草子ありてそのまうをたてりて
又おのりて西の法をまうもあうりて心状

水泉

一深谷の太刀言内を居ふりて法ぬりてさうゆりて
西のりたれまうりて法をりてまうり

一深谷の太刀言内を居ふりて法ぬりてさうゆりて
めをさくふ公の門のくおあてに又内を居とくありて

私言河原の官の法ぬりて法をりて法ぬりて
大正の官の法ぬりて法をりて法ぬりて

御堂原長徳年中童随力六人を賜てさう又
波石はく由有るん状

遊生

一省物法ありてあかりたるおもひり

むし一骨に類叙すといふ人あり暴風の次部の色も
丸形のありしつとてさうりて敷子燭とてしじびあいたる
とて屋の板とねとてさうりてさうりてさうりてさうりて
もい堂の表より堂をへる敷あり又桂中納言物類
とてあまの物とあまの物とてさうりてさうりてさうりて
ぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて

繕合

一えさうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて
うねとてさうりて

よまひ類装男女懐木の惣名くうのをこ振匣う
ちとて打ち袋巾箱正室の廣蓋のあやうの所
くの潤なとてうりて物とて長一尺一寸廣一尺六寸高

一尺一寸面花梨木とゆきて貝とてさうり螺細也家
細とて寸置口とて式とて送物とて時用之かりとてさうり
箱とて香壺袋事也御厨子式の潤な也法書とて
法書とて入る

一さうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて
卵とて卵とてさうりてさうりて

くさうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて
とね名と 惣按 い義め何れ共緒方事状
くいさうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて
たかさうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて

一さうりぬいしきさうりてさうりてさうりてさうりて

檢頭文集判柳假馬柴匣とて一匣は立所齋宮抄

院若くは節の量に用之中古以来やうな絶り其
實れきくも節の振りくくはてらふの入るも也
旅のそくも同か也 心象と組綫組の地も也
而論心の象と 行研と小長衣と着る時とく
梅花風情の枝と流りて冠にさすし 蘿糸紙袋の
りく又じきひ袋のりくもさり 節も袋はも
おられも入る百袋ぬる象也袋のりくこのあふと
りも也たへん袋の糸乃端に糸玉をとりやうに
結らるる文とを款ともけや

松風

一よりひりくむむりやうに也

袂え玉の焚の片随候地紙いそく把の枝若にはみぬく

一より玉也よりひりくもよりて袂え乃むくも也

一よりひりくも也

ありしこは飯乃る也諸社祭は飯を人よと惟時上人
詞云みありしはう油つれふ 日本紀云まといふ
而も先代より

一節にさり流るるんたりもこもさりよりひりくはた
まは枝やと流るるも也ゆりありまなり

小鳥と云雀也萩の枝九のちと頸翻のちとせと
こみてやとれ山若にせと流るるありたる也とひ
りもさる也永觀年中未雀流へ備進の小鳥竹吹ハ
萩の枝一節も雲雀也と鳥の尾とを象ととて
けく宇派室流日記繪よりは事小地抄物と下

小徳成のころりきくくく同く

一此のころ事

行河云沛國を帝のくれ流る沛年志秋に
いこのころりきくくくくく公徳公記
試樂事也其河くくく人まひ人のくくく
わさのころりきくくくく次沛沛沛沛沛
のころりきくくくくくくくくくくく
年志秋

玉鬘芳

一天下くくく自はくくくくくくくく

漢の代醴氣まいたくくくくくくくく
のふくくくくくくくくくくくくくくく

あれはくくくくくくくくくくくくく
といえんはあはくくくくくくくく

一佛の沛中くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

長谷寺流記云廣徳宗を帝のくくく
馬頭夫人くくく顔めくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
もくくくくくくくくくくくくくく
陽列の沛羅國くくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

長谷寺觀音於位の大薩埵也彼國ハモリ東方に
彼方に向て祈禱しす海ハ感應ありて一に
仍礼拜して一に名号をさるるてあり然れ七ケ日に
あつた曉異僧來て懸水と云ふ人乃向ふと云ふ
幼少也流をえてこれハ端嚴美華にありて其後
后妃乃中に支ふ二日月に終るはつりあり
是編小泊瀬觀音の利益なりと云へて大廣國執符
三年丙申七月十八日諸侍女とひ記并て明列の津に
出でて寶物十種と平朝小と云ふれり是もそのを
は物語より云ひありや

一 乃心入

上代より主嫁す着也

佐成の云為事也

胡蝶

一 春のさくらさきあけのさくらさき

あけのさくらさきハ物部物之妻也四乳響料

一 春のさくらさきあけのさくらさき

よハ礼子のたれまねひつへに今一記

鬘美ハ名守也あきさう一記ハの大端なたに
は初なるのありれりて家かよて倒像ハ之と
さうはあきさきハ礼子ハ監取ハ之と又彼を
迷惑のあまりに位と倒像をりて後ありと
常夏

一 常夏 倒像ちりてそれとなれりてなれりてあり

一 常夏 倒像ちりてそれとなれりてなれりてあり

琴粒物氏十卷秘抄より

一 細長の上臈乃おのゝつめの紫米也又うねん女
御子乃りま辰乃付おのゝつめ女房も考へ細米
紐とつらなる物と云ふことありしに ねらりたる色
の袴古弊のゆえに ねらりたるも 地と薄く赤い
漆と入りと云ふこと 漆と入りしは 袴上古弊も
用ひしこと

一 ねらりたるも ねらりたるは
天竺古印素蓋鳥尊れたよのむらさきと云ひしは
一 ねらりたるも ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは

藤裏茶

一 文籍にて家様といふものありしや

漢高祖又右公の家人尊して礼敬といふる家
人父子は礼なりしを 天子は 尊んで 門
ひりて 礼せしむる 父を 尊んで 高祖 天子は 尊んで
尊んで 礼せしむる 父を 尊んで 高祖 天子は 尊んで

一 ねらりたるも ねらりたるは

賀茂祭の茶乃日清素蓋のねらりたるも 有祥事
あれと云ふこと

一 ねらりたるも ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは
ねらりたるは ねらりたるは ねらりたるは

和云注のそののりきあしく生物語のふくじ事討
めの秘事也あ節に随く流く仍め細らあ
う記あうけりこととあは深き其表式と載く
圓明寺のむす物と結の時と和しく白撮と若く
生物語前 後成と記云はるこころはうそあきあ
しとあうりしはるあこけあかしく出家乃おこれ
を尋にむむるうた けりその名もあふまう
う山あけに一目うけたるふたり 又伶人支氏記云
年人切案の曲と秘りあう甚時あうばるこ
若く足跡の装束若めは椽のりや南を八舞
の時乃あうつるりこ思てたり又つるりこ
袍しあうこあ也

茶業

一は物語五十四帖内以一名分上下例事

漢晉帝紀第一卷 高紀後漢晉百卷内上下 紀日

本紀 非代うは乃物語 源順作也五吹

又立並例事 うつせむりか 第一本の字は保物語

也五の並 一乃門の使 二業乃実

一和云い海うり君せんきうれし秘く是乃

和云わいアうらちんといを改まほくあり記す一
朱蓬院女と云と心くくそめく夕雲かと記は
のれこよひはむむむらこころと記す梅の初也
行記云わいこころと云と記すはわくそ
巻よき記すはわいこころと云と記すはわい

万子衆生一心に悲哀一葉尊者滅期よあこ
しめて歎信一平也法華経云仁は夜滅び
如新盡火滅

一奇なりれる存をこし一せしむりてことなる中の志を
のりて力給ぬ

舊記云蹴鞠入具し修らるる乃技とわらるるを
甚例きく又資雅々懸末枝と睨りて一と蹴
ありけるより一付侍りて蹴鞠ハ震旦國軒轅
皇帝の好ありて我朝ハ仁皇初天皇御代より
天智天皇吉子末付徳足大匠相共法興寺にて令
蹴けり又吉子とて鞠名物と平よのは録ありし
あり仁皇末御代浪實或時入具し保自兼中

必給湯洗く由侍り今はそむくことおもはるる
らひしむくは洗せしむるは乞堂よし又蹴鞠砌を
飲食の難治方よし梨耳子柳浸るるや二葉流
并死る方方聖砂ホウ仁意と高きをほりらわ
梨耳子等の物人こそむとよりくふり物とて
ありけしはむらあつて花を井の池乃殿とむす
一はこりらわりのやしらの物とてむくそのあ
よふよりませはあをさうとてなまさうふ
さうさう物りりてはらけはむ

椿餅合茶の又左の海菜なほむらうくふく多
らあさくふらやうのころ利あは五
種別物風情者也

くそひもさうゆーよりたらうくーとれたん

文選云馬鬣青菴礼記檀弓に墳のりなきはく
小なりそ乃内馬鬣封といふゆあるは川の流を
くまれたらうとに思ふ也又そのうへに松をうへ
ふるうららそ乃いさらうに思はうい世をうわ
松といり申おの君とほほれふとよまへくるゆ
川の松をむく人の形をさるるまもあるん
一より文ゆり柄いさばらうといひさうらうは
よのちうりに帳をたてかこひりとおたそい風を吹
く

唐穆宗皇帝文宗中此花乃さうりに帳をさる惟
をかりん風はあまうい事貴せらるいゆを振者

名法をり奉新町の店と惜表御史といふ
一さのあそハハより人乃水々

ちんの水ハ社以の水に賀茂も餘社も作

例ありと いゆいん河海
兼いん竹畧

一昔をたにそい門いむろきねり免

僕のび于そといふ入門をさるたわさういといとく
それ獄をつつさうとて陸徳ありと子孫なるといと
之後より子干定國大匠ありて駒馬高畫の
車この門より出入

雲隠

一當考有名題を其評准校事

天台にまところの四教は龍教は有門通教は空門

別教ハ亦有亦空門圓教ハ非有非空門也有門ハ
毗曇論ヨリ〜空門ハ成實論ヨリ〜亦有亦
空門ハ毘勒論ノ人非有非空門ト迦旃經ヨリ
多ク云クハ毘曇成實ハ漢土ヨリ〜毘勒
論迦旃經ハ天竺ニシテ由リ〜好ト云ク孫ハ衣
乃〜あり〜云ク〜ハ〜空門卷名ノ〜あり〜詞
ニ云クハ例次 釈云空門ハ幻乃次〜歟〜根ナリ
此ヲ介〜物〜同縁ト云ナリ〜〜ハ宗
或ハ自宗ト〜あり〜ハ〜十部ト云ナリ 或ハ
雲ク〜此ノ宗成〜入〜道心成〜出
〜〜宣旨以下〜高卷〜云々
〜〜ハ〜不信用〜

白紙部ハ卷 兼中將ト

一 太子の口より力なくひらき〜云々〜
〜〜云々

法華文ハ才ニ云羅云是瞿夷子又同疏記才ニ云者
日瞿夷今日耶輸今日瞿夷乃是天女耶輸多羅
之子羅睺尊者佛出家之後經六年而誕生大
臣等疑之耶輸多羅懷子投火不燒也

一 の〜乃〜あり〜
賭射還答のり〜後左將〜の〜け〜ひ〜
我亭〜種〜乃〜夜〜の〜

紅梅

一 か〜え〜物〜ふ〜れ〜な〜し〜

皮笛は吹笛のりゆりて吹く

天慶五年正月七日門青馬酒盃十一巡王卿有
酒氣吹皮笛今日李部王訖吹嘯之由有之
又云天曆之江廣幅中納言九條有逸等宴會訖
云今日公卿等入真之餘吹皮笛云々
又云自故今出川入道相國被下遣新渡笛於大
神式貫云此笛未知其名可勘申云々此笛中間
有如針穴々裏張羊皮宛如薄様人々雖稱哥
笛之由式貫獨成皮笛之類云々

竹河

一 此は深氏乃此をうりてをたれ流りてのり乃れ
るなり

夏燈を燈をたれと云は儀成野のこころなり
あまの御孫をたれと云は夏燈をたれなり
も又うりてたれなりと被し續して世あり
たれと云は又詠後のたれなり

梅のしほ

一 此のしほはあし ありては沈ぼ也又下校なり
又云のしほはあし ありては沈ぼ也

楊梅

一 此のしほはあし ありては沈ぼ也又下校なり
又云のしほはあし ありては沈ぼ也

鑑南

一海仙市といふ物紙あきく

は曲承和清行幸津泉苑令伶人兼松奏示
宣勅云一迎於中清之間新作曲可奏者笛師
清上篳篥所取廣亦一迎中作は曲

一松平松清のあきく

おの梅りいそかく海を汝のともをあらうりちま

早蕨

一あかてゆやうる物水うふふく舟りもあうぬそ
あひし物と

私云あかてゆやうる物水うふふく舟りもあうぬそ
のよをよういぬあてあういん丸方ありあ首

ふれ家なる當し ちかてうる湖光くうり

寄一生

高木もも
又いぬあき

一ちあうらまらあていあひしもほいあせ

右のふ松の爲の書を入あてわわむあき
一せじうの行ふたつさあまあてく下ゆきを

ゆきくは杉松く編麦人食小を胡麻けあ殺
とみあふさうりて杉うて餅はあてか
束首がうてく松あをせくあきく竹乃首と
てその中にさくさく入てありさうてあき
て其勢變六の酒度のいさあふくあ殺ハ
式いさあきさあきさあきさあきさあき
くさうせんいあきさあき青色にさうこの書

修若ハ柔の粉とろり〜花をたたく深くわい
ひ〜黄の色の色にし粟飯をうら〜苧布も
夫子ももそめく〜かむひ〜赤さる〜小
夏向〜色よハ柔あさ〜色ハ胡麻〜
衝重よ上葉と〜入て青黄赤白あ〜か〜よ
治事にあ〜い〜と〜寸〜わ〜く〜す〜念〜ひ〜ろ〜の〜
其中〜液り〜ハ瑞濁り〜ろ〜い〜わ〜く〜耳葛に麝
香紙と〜ろ〜ろ〜ろ〜入〜ろ〜ろ〜ろ〜又〜け〜文〜程〜ど〜
に〜酒〜あ〜ま〜つ〜を〜そ〜く〜二〜三〜つ〜あ〜ろ〜ろ〜り〜
ゆ〜ろ〜ろ〜す〜ろ〜ろ〜あり
一〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜孫の〜ろ〜ろ〜こ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
と〜ろ〜ろ〜入〜れ〜ろ〜ろ〜

道曾〜ろ〜一日はあ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
又日本書紀云大山寺皇子睡菟道河而没〜
〜ろ〜ろ〜液守ろろ子〜これ〜唯按せらぬ

子分

一人〜は〜い〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜の物〜ろ〜ろ〜せ〜ろ〜ろ〜も〜こ〜ろ〜ろ〜
〜ろ〜ろ〜物〜ろ〜ろ〜ろ〜

水飯 題は産云蓮子乃重〜あり 藕実を記

夢の活稿 注の作

一〜ろ〜物〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
定家卿法云字保保物給ろろろろろろろろ
漢高祖伝呂氏絶山後教百餘後赤眉の黨
山後之寶紙〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜これと〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜

人の形を弄していつらうと一仍彼意
をこれと托するも人よたふ天の如く死
人の心とを却てさせて墓にうつむむ心
をわかれ形を修して祝詞も上天の帝王如
く也此にたふさるまはるの止る年又續る
うけしむる後うけしむる也

一は巻の巻末

徑言生死涅槃猶如昨夢一部の終乃後涅槃
也といふんこしは説可謂道理歟 又云仔細
送仔細冊子天の浮揚乃とてうとてうとねれと
ありはく涅槃はるをての浮揚といは物次
の先は後乃とてあり 寺田見河海
兼仍見之

原中最秘抄者光源氏物語之元行河法師所
撰述也補苴不明水亦く録漏包羅如漢曲策
之舊事可謂勅矣今依台命交夷其繁辭撮取
其典要以便後学之觀覽仍詠和歌二章以擬
跋語云

ゆくりとをちいさなるはまの巻の巻末なりわく
そのありはるん心乃深きうんそりく
あこことなご

耕雲山人明鑑 卷下

右原中最秘抄雖多誤脱依不得類本不能校正

石唐平朝法卷之百十六物經部十也
原中為秘所ノ下ノあり小因縁あり異々
下ノく之目縁斗のあり開ノり亦七位あり
十時

天保二年冬十月廿六日夜經院にあり

中村萬壽真道

董荷録卷之百五十二

董荷録卷之百五十六
大尾

